

第27回

函館港イルミネーション映画祭

第25回シナリオ大賞

準グランプリ

2021

指の形

本田 周





【作者プロフィール】

ほんだ あまね

文学部哲学科卒 アニメーション制作会社などを経て専業主婦

【あらすじ】

夫を亡くしたばかりの須藤薫（60）の許に、未成年後見人の依頼が舞い込む。十五年前、薫の息子明生は、離婚後の荒れた暮らしを送る内に自殺の様な死に方をしていた。その別れた妻が産んだ子・怜音（15）が息子の籍に入っていたのだ。

薫は戸惑いながらもひとまず母を亡くした怜音を引き取る。

怜音は恵まれた環境に居なかったようで、薫に対しても心を閉ざしたまま。薫も、憎い女の産んだ子、まして本当に明生の子なのかの疑念があり、二人の関係はぎくしゃくする。

が、或る日、怜音の指の形が死んだ明生にそっくりな事に気づき、薫の心はほどけて行く。

怜音も、同級生優奈と親しくなり「一緒に暮らしてたら家族」という言葉に元気づけられる。優奈も両親を亡くし、姉夫婦と暮らしていた。

二人は漁火公園を訪れる。怜音は『漁火』が、イカを集めるのではなく、イカが明るい所から逃げる習性を利用する為の物だと知り、自分を重ねる。

実は、怜音は自分が薫の孫ではなく、母と明生ではない男との間に出来た子だと知っていた。

薫は迷っていた怜音とのDNA鑑定をする。怜音が「鑑定結果で孫ではなかったら？」と薫に尋ねると、薫からは冷たい返事が返って来る。

怜音が家出する。薫は慌てて怜音を探す。過去の思い出が重なる。明生との最期、遺体を引き取りに行った警察署の慰安室……。不安を膨らませる薫。もう家族を失いたくない。

怜音は無事に保護され、薫は安堵し、二人は家に戻る。

薫は怜音の将来を考え、大学進学できる事も告げる。怜音は嬉しいがいたたまれず、薫へ全てを告白する。亡くなった母に「うまく取り入れ」と言い残されていた事、薫の孫ではない事。薫は聞こえないふりをする。「鑑定結果が」と言う怜音に、薫は怜音が「間違いなく孫だった」と伝える。安堵する怜音。

祖母と孫の楽しい食卓を囲んだ後、薫は未開封の鑑定結果通知を封筒ごと破いて捨てる。

海では漁火の火が消える。

【人物表】

須藤 薫 (60)

夫を亡くした専業主婦

須藤 怜音 (15)

中学三年生の少年 薫の孫？

吉田 杏子 (66)

薫の友人 民生委員

松島 千絵 (62)

薫の友人

岡崎 優奈 (15)

怜音の同級生

新藤 義男 (50)

新聞販売店店主

古谷 美穂 (22)

優奈の姉

職員 (40)

児童相談所職員

教師 (30)

怜音の担任教師

○住宅街（朝）

朝陽を受ける函館山を望む通り。

柵に戻す。

テーブルについてコーヒーを飲む薫。
柵を見つめている。

○須藤家・外観（朝）

並ぶ家々の中の一軒。

『須藤』の表札。

と、さつき仕舞ったカップを取り出して、結局それにもコーヒーを注ぐ。

新しくはない、ごく普通の二戸建て。

○同・和室（朝）

L D K 隣の和室。

○同・L D K（朝）

キッチンに立つ須藤薫（60）。

コーヒーメーカーの終了音。

薫の前に素人の焼き物らしきマグカップが二つ。

薫、戻って来てテーブルにつく。

薫、コーヒーを注ぎ始める。

薫「（あ）」

薫、まだ注いでいない方のカップを

○同・L D K（朝）

薫、戻って来てテーブルにつく。

新聞を読もうと眼鏡を手に取り、窓

辺の植木鉢の緑が枯れている事に気づく。

づく。

ぼんやりと鉢を眺めながらコーヒーを飲む薫。

○さっぽろテレビ塔

○病室

窓から遠くにさっぽろテレビ塔が見える。

大部屋の一画。

隣と向かいとの間にはカーテンがひかれ、狭い空間の中、窓際のパイプ椅子に座る

須藤^{れおん}怜音（15）。

ボサボサの頭で表情は無い。

ベッドに横たわる人の姿は見えない。

怜音は黙って聞いている。

女の声「あなたは戸籍上須藤の家の子にな

ってるから。ばあさんもいい加減弱ってるだろ。取り入って上手くやんな。あんななら出来るって。母さんなんもしてあげられなかったけど、後は何とかしてもらいな」

怜音「……」

○タイトル

『指の形』

○五稜郭

函館の空から見る五稜郭。

○カルチャーセンターの入るビル・外観

カルチャーセンターの看板。

○カルチャーセンター・教室前の廊下

『刺繍教室』の張り紙の部屋から出てくる、中年からシニアの女性たち十人弱。

中に、薫、吉田杏子（66）、松島千

絵（62）。

杏子「いつものとこ寄ってくでしょ？」

千絵と薫「（にこやかに頷き合って）うん」

○ファミレス・中

テーブルを囲む薫、杏子、千絵、か
しましい。

千絵「さっきの見して」

杏子がハヅキルーペの様な眼鏡を取り出す。

千絵、眼鏡を掛けて手許を見る。

千絵「良く見えるわあ。これホントに百円

シヨップ？」

杏子「そうそう。三百円だけどね」

薫「私も買ったの。今日忘れてきちゃったけど。刺繍する時にホント便利。お薦めよ」

千絵「次行ったら絶対買うわ」

杏子、千絵からメガネを受け取りながら

杏子「薫ちゃんどう？ 四十九日も終わって落ち着いた？」

薫「お陰様で。杏子さん色々ありがとうございます。ございました。千絵ちゃんも」

千絵「お葬式、沢山来てたよねー」

杏子「ご主人、まだまだ現役だったもんね」
薫「ちようど定年延長して直ぐだったから」

千絵「通勤途中の事故って、労災になった

んしょ？」

薫「うん、まあ」

千絵「それは不幸中の幸いよね。保障が違

うもん」

薫「色々会社の人がやってくれたから、そ

れは助かった」

杏子、立ち上がった

杏子「私、紅茶おかわりして来る。二人は？」

千絵「あ。ごめん、私そろそろ保育園行か

ないと。孫のお迎えの時間」

杏子「えっ？ 千絵ちゃん今日もなの？」

千絵「そうなの。二世帯住宅なんかにする

もんじゃないわよ、すっかり娘にいいよ

うに使われて」

杏子「頼りにされてるのよ」

千絵「孫がさ、ばあばのお迎えがいいー、

ママじゃやだー、なんて」

薫「ママよりばあばがいいなんて嬉しい

じゃないの？」

千絵「年だから、子どもに付き合うのもえ

つらいたいぎよ」

杏子「動いてるのが健康の秘訣かもよ？

娘さんたちと住んでから、却って若返っ

たって」

千絵「文字通りおばあちゃんなの？」

薫「ううん。千絵ちゃん活き活きしたって。

肌もツヤツヤだし」

千絵「(笑って) なんもなんもー。なんも出

ないっしょ。じゃ、これ私の分ね」

千絵、テーブルに小銭を置いて、席

を立つ。

笑顔で見送る薫と杏子。

薫「千絵が出て行ったのを見届けて。

……」

薫「(小さな溜息をついて) 毎度毎度孫の話
ばかり」

杏子「私たちとは全然違うわよね。子ども
や孫の居る人生」

杏子「(微笑んで) そうねえ」

薫「そうね、いたら……。うちにはいたけ

薫「いい様にこき使われて。あれじゃ、ば

どね」

あやよ」

杏子「あ……ごめんなさい」

杏子「薫ちゃん、肌もツヤツヤとか言つて

薫「あーなんも。いいの、いいの。もうず

たじゃない?」

つと昔の話……」

薫「『ばあばのお迎えがいいー』って、娘が

杏子「明生君亡くなって今年で15年?」

孫にそう言わせてるのよ、きつと」

薫「(頷いて) 家族は消えてって、残るは私

杏子「かもね」

だけ」

薫「偉いと思うわよ。あの年でママチャリ

杏子「……」

に子ども乗せて送り迎えしてるんだもの」

薫「(笑って、軽く両手を上げて) おひとり

杏子「ママチャリならぬババチャリね」

様万歳!よ。残りの人生、気楽に楽しむ

薫と杏子顔を見合わせて笑う。

から。色々付き合つてよね」

薫「あんな風に子どもと孫に尽くす人生

杏子「そうね、私もすぐおひとり様になる

から」

薫「杏子さん年上女房じゃない？　まだま

だ先よ」

杏子「薫ちゃんが羨ましくなってきたわ」

笑い合う二人。

○児童相談所・面談室

机を挟んで座る、怜音と職員（40）。

怜音の髪の毛は切り揃えられている。

職員が指した机上の書類に『須藤怜

音』の文字。

職員「怜音君の言う通りだったよ。戸籍を

確認したらね、怜音君が生まれる前に亡

くなったお父さん、この方のお母さん、

怜音君にはおばあさんだね、ご健在で、

今連絡してるから」

怜音「はっ」

○須藤家・外観

○同・LDK

菓子と茶の載るテーブルを挟んで、

薫と杏子。

薫「ちよつと相談」

薫が杏子に書類を差し出す。

杏子「どうしたの？」

薫「読んでくれる？」

杏子「（手に取りながら）いいの？」

薫「未成年後見人になれて、児童相談所

から連絡が来たの」

杏子が驚いた顔で書類を読んでいる。

薫「杏子さん民生委員やってるから。こう

いうのも詳しいかなくて」

薫、更に書類を差し出して

薫「これ、取り寄せた戸籍謄本。息子に、

明生に子どもがいたのよ」

杏子、書類を見て、目を見張って

杏子「あら、ほんとだ！ 明生君の籍に入

ってる。えっ？ 何？ 明生君の子って

事は薫ちゃんの孫じゃない！ え？ 知

らなかつたの？」

薫「まったく……。まったく知らなかつた

のよ。離婚した後三百日以内に生まれた

子は父親の籍に入るって」

杏子「あ。なんかそんなの聞いた事あるわ。

この子……。生まれた時は明生君……」

薫「そう。もう明生が死んだ後なの」

杏子「亡くなった後で生まれてたのね……

あの、別れたお嫁さんの？」

薫「そう。父親が死んでても、生まれた子

は父親の戸籍に入るんだって」

杏子「へー。それは知らなかつたわ」

薫「明生の結婚で、戸籍が分かれてたから、

主人が死んで届ける時も気づかなかつた

のよ」

杏子「ずっと知らないままだったのね」

薫「そう」

杏子「（書類を見て）そっか。苗字もおんな

じ須藤なのね。この字、なんて読むのかな、

これでレオンって読むの？」

薫「（鼻で笑って）キラキラネームっていう

の？ 怜音って。あの馬鹿女がつけそう

な名前よ。杏子さん覚えてるわよね？

あの女のこと」

杏子「うん……」

薫「(憎々し気に) あの女が大騒ぎして出て
って。離婚成立したら、すっかり弱った

明生はヤケになつて……」

杏子「……」

薫「あの女のせいで明生は死んだようなも
んよ」

杏子「……明生君に子どもが居たとはね

……」

薫「あの女の子もなんて、碌なもんじゃ
ないわよ」

杏子「でも薫ちゃんには孫でしょ? 出産

したつて連絡も来てなかったの?」

薫「全く何にも。明生の葬式にも来なかつ
たし。まあ来られたもんじゃなかったら

うけど」

杏子「そのお嫁さんだった人、この怜音君
の母親は? どうしたの?」

薫「死んだつて。ガンで」

杏子「(眉を寄せて) ああ……、そうなの。

それで連絡来たのか。明生君と離婚した
後、再婚はしてなかったの?」

薫「しなかったみたい。てつきりどつかの
ろくでなしと一緒になつてると思つてた

んだけど」

杏子「……」

薫「兎に角、死んだつて聞いて清々したわ。
あの女が楽しく生きてるかと思うと、腸

が煮えくり返る所だったから」

杏子「……でも、子どもは関係ないわよね」
薫「だからつて……。それで戸籍を辿つて、

私に後見人を、つて。未成年後見人つて

何？ どういう事？」

杏子「まあ保護者よ。親がいなくなつた未成年の法定代理人。普通は子どもを引き取つた人になるわね」

薫「引き取らないと、つて事？」

杏子「その亡くなつた方のご両親や兄弟は？」

薫「(ため息) あの女の両親はとつくに死んでるし、兄弟もいないつて」

杏子「(書類を見て) もうこの子に身寄りはないのね……、薫ちゃんしか」

薫「やっぱり引き取らないとダメ？」

杏子「嬉しくないの？ 孫が居たのよ」

薫「今更……」

杏子「だつて。たつた一人の身内でしょ？」

薫「つて言われても」

杏子「ちよつと……いいなあ」

薫「え？」

杏子「千絵ちゃんの娘や孫の話、羨ましいつて思う時もあるつて」

薫「……」

杏子「うちはまだ旦那が元気だけど、薫ちゃん、ご主人亡くされたばかりだし」

薫「それと関係ある？」

杏子「この先まだ長いわよ。ずっと独りじや寂しくない？ まあ素敵な出会いもあるかも？ だけど」

薫「(笑つて) そうよ。出来れば、新しい孫より新しい旦那がいいわ。それにほんとに、明生の子かどうだか」

杏子「妊娠した時はまだ明生君と結婚してたんでしょ？」

薫「そうだけど。あの女だもの、わかった
もんじゃないわ。大体、離婚するとき
妊娠してるってわかってた筈なのに黙っ
てたつ事でしょ？」

杏子「黙ったまま、一人で育てるつもりだ
ったのかしらねえ」

薫「どうだか。明生の子だったとしてもあ
の女の産んだ子なんて」

杏子「何それ？ 坊主憎けりや袈裟まで憎
いってやつ？」

薫「随分ババ臭い例えね」

杏子「(笑って) もうババアだもん」

杏子、書類を戻しながら、少し改ま
って言い聞かせるように

杏子「薫ちゃん。引き取ってもね、上手く
行かなかつたらまた児童相談所、施設に

戻って貰う事も出来るから」

薫「そうなの？」

杏子「(微笑んで) 取り敢えず会ってきなさ

いよ」

薫「……」

杏子「困った時は力になるから」

薫「……」

○児童相談所・応接室

座っている職員と怜音。

スーツを着た薫が案内されて入って
来る。

職員が立ち、慌てて怜音も不器用に
立ち上がる。

職員「(薫に) こちらが怜音君です」

薫、黙ったまま訝し気に怜音を一瞥。

怜音、緊張と不安の面持ち。

込む。

○住宅街の道（夕）

坂道。

紙袋を提げた薫の後ろを大きなボス

トンバツグを持つてついて行く怜音。

薫は後ろを気にせずどんどんと歩いて行く。

行く。

怜音、振り返って坂の下を見降ろす。

薫、怜音が来ない事に気づいて立ち

止まる。

薫「この先右に曲がったら、あんたが通う

中学校だから」

どう接したら良いやら、いつにも増

してぶつきらぼうな態度の薫。

怜音、小走りに来て通りの先を覗き

○須藤家・外（夕）

薫が怜音を玄関に促す。

薫「ここが家」

怜音、辺りをキョロキョロしながら。

怜音「はい」

薫「ここまでの道、覚えた？」

怜音「多分……」

薫「え？」

怜音「大丈夫です」

○同・玄関・中（夕）

薫、上がり框に荷物を置いて

薫「はー、たいぎだった。今日は疲れたか

ら出前取るから。かつ井でいい？」

怜音「はい、すみません」

怜音の表情は硬い。

薫「何してんの？ 上がって」

怜音「お邪魔します」

薫の視線の先、怜音の脱いだ靴は随

分と傷んでいる。

○同・怜音の部屋（夕）

元は明生の部屋だったらしく家具が

古い。

薫「ここがあんたの部屋。なんか必要なも

のがあつたら言つて」

怜音「あ、ありがとうございます」

怜音、部屋の中を見回す。

カーテンを開けて、窓からの景色を

見る。

○杏子の家・LDK

窓から函館港が臨めるマンションの

一室。

テーブルを挟んで、薫と杏子、羊羹

をつまみながら緑茶を飲んでいる。

杏子「どんな感じ？」

薫「まだ何とも……」

杏子「すぐに連れて来るとは思わなかった

な。会つたら情が湧いたんでしょ？」

薫「違うのよ。あれよあれよ、と。押しつ

けられて」

杏子「そうなの？ 会つたらやつぱり可愛

いんじゃない？ 孫だもの」

薫「孫つて……。もういきなり十五歳よ。

何考えてるのかよくわかんない。身体は

大きいけど、もさつとしてハッキリしな

い子……暗いのよ」

杏子「そりゃあ、親を亡くしたばつかだもん。

段々慣れてくるわよ」

薫「顔がね、あの女に似てるのよ……。なんだかやっぱり好きになれそうもない……。ダメだったら返すの、相談に乗ってよね」

杏子「まあ、様子見て」

薫「(溜息をついて) 杏子さんにでも一緒に行って貰えば良かった……。なんだかよくわからない内にこんな事になって」

杏子、キッチンに立ち、タッパーに料理を詰め始める。

杏子「肉じゃがとポテトサラダ、持ってくるでしょ?」

薫「いつも悪いわね」

杏子「怜音君も気に入ってくれるといいん

だけど」

薫「なんだか憂鬱よ。早くも後悔してんの」

杏子「早いわよ。愚痴だったらいつでも聞
くから、おばあちゃんデビュー頑張んな
さいよ」

薫、聞こえるような溜息をつく。

杏子、テーブルに戻って

杏子「無理する事は無いけど……。でも明
生君が生きてたらどうしたかねえ。明生
君には親として責任があつた筈よ。明生
君が果たさなきゃいけないかつた事よ」

薫、ハツとして顔を上げる。

薫「明生の代わり……。私が……」

杏子、タッパーを入れた紙袋を渡し
ながら薫に微笑む。

○中学校・外

張り上げる。

正門を出る下校の生徒たち。

新藤「あいよ」

中に一人だけ制服の違ふ怜音。

怜音「あの、新聞配達したいんですけど」

男子生徒数人が怜音に声を掛ける。

新藤「(見回して)見ない制服だね。高校生?」

生徒たち「よっ! 転校生! さいならー」

怜音「あ、転校してきたばかりで。中学生です」

怜音、軽く顎をしゃくって頭を下げて

新藤「そのの?」

怜音「(小声で) さいなら」

怜音「はい」

新藤「はじめて?」

○新聞配達所・外

ガラスの引き戸の向こう、夕刊の準備

新藤「あ、そ。じゃあ話は早いや。うち中学生もいるから。その子」

備をしている人が数人。

新藤が作業しながら顎でさした先で、

怜音が来て戸を開ける。

上下ジャージの岡崎優奈(15)が新聞をまとめている。

○同・中

怜音「すみません」

新藤「今日、休みが多くなってさ、俺も配達

奥から店主の新藤義男(50)が声を

19

出ちゃうんだわ。帰ったら話すから、

ちよつと待ってて」

怜音「あ、手伝います」

新藤「いいの？ じゃあその子に聞いて」

怜音、優奈のそばに来る。

優奈「別に手伝って貰う事ないけど。明日

から自分の自転車持ち込める？」

怜音「あ……借りられれば」

優奈「(怜音の顔をまじまじと見て) 覚えて

ない？ か……」

怜音「え？」

優奈「転校生でしょ？ 札幌から来た。二

組の。同じクラスだよ。岡崎優奈」

怜音「あ！ ああそうなんだ。宜しく」

優奈「こっちは坂が多いから大変だよ。覚

悟しなね」

怜音「はい」

優奈「店長！ この子に自転車貸したげて。

一緒に回って教えて来るから」

新藤「ああ、そうだな。ただ待ってて貰っ

てもな。そうしてくれ」

○住宅街

優奈は電動ママチャリに新聞を積ん

でいる。

優奈の自転車について行く、販売店

の名入りの自転車に乗る怜音。

優奈「今日だけピンチヒッターなの、夕刊

は。いつもは朝だけ。あんたは夕刊もや

るの？」

怜音「そのつもり」

坂道を立ち漕ぎして上っていく怜音。

○須藤家・前の道

優奈が郵便受けに新聞を入れる。

怜音「あ、ここ俺んち」

優奈「え？　ここ？　私が毎朝配ってるん

だよ」

ちようどタツパーの入った紙袋と靴

屋の紙袋を提げた薫が反対側からや

って来る。

薫、自転車の怜音を見て

薫「！」

怜音「(通り過ぎながら) 頭を下げる」

それを見ていた優奈が振り向く。

玄関に入って行く薫の姿。

優奈「おばあちゃん？」

怜音「うん、まあそんな感じ」

優奈「(笑って) 何？　そんな感じって。変

なの」

怜音「……」

優奈「大体、よっ！　とかおっ！　じゃな

いの？　何頭下げてんの？」

怜音「(聞こえないふりで) 坂きついっす」

優奈「太腿、鍛えられるよ」

走り去る二台の自転車。

○同・LDK(夕)

一人、テーブルに着く薫。

玄関扉の開く音。

怜音の声「ただいま戻りました」

怜音が入って来る。

薫「さっきのあれ、どうしたの？」

怜音「あ、今日、新聞配達の子決めた

きた。だから夕ご飯は大丈夫」

薫「？ 大丈夫？ 何が？」

怜音、頷く。

怜音の表情は硬い。薫も硬くなる。

薫「いつから？」

怜音「夕食は要らないです」

怜音「え？」

薫「？ 何言ってるのさ」

薫「いつから、家でご飯食べなくなったの？」

怜音「おばあちゃんには迷惑掛けないから」

怜音「いつから……中学入った位から」

薫「おばあちゃんじゃないでしょ。薫さん

薫「ご飯作って貰わなかったの？」

でしょ」

怜音「給食あるから」

怜音「あ……。薫さんには迷惑掛けないから」

薫「給食って、昼だけでしょ。夏休みとか

薫「迷惑って……」

冬休みは？」

怜音「家で食べないから」

怜音「……」

薫「食べない、って……。ご飯を？ え？

薫「世間体ってものもあるから。家でご飯

今迄は？ 今迄どうしてたの？」

食べて」

怜音「ずっとそうしてたから。適当に買っ

怜音「……わかりました」

て食べる。バイト代入るし」

薫「あのねえ、今迄どうだったか知らない

薫「今までずっと？ ずっとそうだった

けど、今日だってわざわざあんたに、って、

の？」

おかずを分けてくれた人だっているの。

これからはうちで夕ご飯食べるの。わか
った？ 返事は？」

怜音「はい」

立ち去った怜音の背中を見ている薫、
無然とした表情でキッチンに立ち、
クリームクレンザーを取って、シン
クを磨き始める。

薫「(独り言) なによ、迷惑掛けません、って、
偉そうに。もう十分迷惑だつて。全く可
愛げない」

薫、ゴシゴシと力いっぱいシンクを
磨く。

ひとしきりやって水を流すとシンク
がピカピカになっている。

○同・外観(朝)

昇ったばかりの朝陽に照らされる家。

○同・薫の寝室(朝)

鳥のさえずり。
布団の中の薫、目を開き、耳をそば
だてている。

○同・玄関(朝)

出て行こうとする怜音、自分の靴の
隣に一回り大きい新しい同じ靴が並
んでいるのに気づく。

怜音、後ろを振り返ってから、新し
い靴に足を入れる。

○同・薫の寝室

玄関扉の開いて閉まる音。

じっと聞いていた薫、起き上がる。

薫「朝ご飯」

怜音「あつ、はい」

薫「(ふんという表情) 食べたなら、ちゃんと流しに下げといて」

怜音「あの……靴、ありがとうございます」

薫「サイズ合ってた？ 同じのの一つ大き

いのにしたんだけど」

怜音「はい」

薫、出て行く。

○新聞配達所・外(朝)

配達に出発する数台のバイクと自転車。

中に優奈のママチャリ。

怜音は販売店の自転車。

それぞれ散っていく、バイクや自転車。

○同・和室(朝)

おりんを鳴らし、仏壇に線香をあげる薫。

○須藤家・LDK(朝)

一人分の朝食を並べる薫。

玄関扉の開く音がして、怜音の足音。

○同・台所(朝)

怜音入って来て、薫の姿に驚く。

薫が来て、洗いカゴに目を留める。

怜音の食器は洗われて並んでいる。

来た事あったんでしょ？」

薫、それを見ながらコーヒーポット

怜音「いや。はじめて」

からマグカップにコーヒーを注ぐ。

優奈「ずっと札幌だったの？ 函館来た事

なかったの？」

○八幡坂辺り（夕）

怜音「うん」

一人歩いている怜音、坂を下りてい

二人並んで歩きながら。

く。

後から優奈の乗るマウンテンバイク

るよね。おばあちゃんと一緒に引越し

が来る。

てきたんじゃないよね？」

優奈、怜音を見つけて近くに寄る。

怜音「（面倒そうに）ああ、俺だけ」

優奈「よっ」

優奈「親は？」

怜音「（気付いて）あー！」

怜音「（気まずげに）いない」

優奈「（自転車を降りて押しながら）何して

優奈「両方とも？」

んの？」

怜音「ああ」

怜音「見物……函館観光……？」

ずけずけと聞いて来る優奈の無神経

優奈「函館、おばあちゃんちがあるなら、

さに怜音は少し苛立つ。

優奈「なんで？ 死んだの？」

怜音「(無然と) ああ」

優奈「うちと一緒だ」

怜音「！」

優奈「うちもね、親は死んじゃって、お姉

ちゃん夫婦と姪っ子と住んでるの。親無

しどうしお仲間だね」

怜音「(優奈をきよとんと見て) ……」

優奈「(構わず) ああ、こっちがほんとの愛

車ね。配達の際は、お姉の電動借りてるの」

怜音「あ……そうなんだ」

優奈、自転車に取り付けたバッグか

らビニールに入った苗を取りだす。

優奈「これ、あげる」

怜音「え？」

優奈「ミント。いい匂いだよ。すぐ育つから、

育ててみて。鉢はそのままでもいいけど、

すぐ増えるから」

怜音「え、なんで？」

優奈「引越し祝い？ お姉、花屋だから、

ただみたいなもん。気にしないで」

怜音「あ、ありがと」

優奈「函館へようこそ。ここからの眺めが

サイッコーだから。あとロープウェイも

乗ってみて」

優奈、自転車に跨り去っていく。

それを見ている怜音、手許の苗に視

線を移す。

○同・LDK(夜)

食卓に並ぶハンバーグにサラダなど

彩りよい夕食。

薫「(声を上げて) ご飯、出来たから」

怜音が来て、食卓を見て目を輝かせる。

あとで自分で出しな」

怜音「すぐに育って、増えるって」

薫、怜音の皿に目を留めて

怜音「ありがとうございます。いただきます」

食卓についた薫、窓辺に置かれたミ

最後にするね」

ントの苗に気づく。

怜音「……苦手で。でも大丈夫です、食べ

薫「? あれどうしたの?」

られます」

怜音「友だちがくれたの」

薫「そう。好き嫌いなくね」

薫「なんで?」

薫、ふと怜音の箸遣いに目を留める。

怜音「函館によくこそ、って。引越し祝

薫「箸はちゃんと持てるんだね……。明生

いだって」

はダメで——」

薫「ふーん。ミント?」

と言いかけて、怜音の指に目が釘付

怜音「そう言ってた」

けになる。

薫「自分で手入れするんだよ」

× × ×

怜音「余ってる植木鉢あるかな?」

フラッシュ

薫「ああ、二階ベランダの物置にあるから。

何処かはわからない暗い部屋

薫が誰かの手を撫でている。

手は遺体となった明生の手。

その指をなぞる薫の手。

× × ×

箸を動かす怜音の指、を見る薫。

薫（心の声）「明生と同じ……」

○中学校・全景

○同・教室

担任教師（30）を前に机を挟んで並んで座る薫と怜音。

怜音の格好は皆と同じ制服になっている。

怜音、一礼して立ち上がり、教室を

出て行く。

教師「しつかりな」

残る教師と薫。

教師（笑顔で）いやあ。本当に良かった。

おばあさまがいらして。高校進学という

事で宜しいですね？」

薫「はい。勿論です」

教師「怜音君、まあまあ優秀なのに定時制

の高校へ行って働くって言うから、どう

かと思ってたんですよ。前の学校からの

進路予定でもそうなっていました」

薫「そうなんですか」

教師「なかなか大変なご家庭だった様で。

こう言っただけなんです、おばあさまに

引き取られて、怜音君には未来が開けた

と思います」

薫「あの……大変な家庭、というのは？」

教師「(気まずくなつて) あつ、それは
……」

薫「今は私が保護者です。これまでの事で何かご存じなら教えてください。保護者として知る権利があると思います、あの子はあまり口を開かないので。聞かせてください」

教師「怜音君は——」

○同・廊下

廊下で立ったまま教科書を広げて見ている怜音。

優奈が、明らかに母親では無い若い女性古谷美穂(22)とやつて来る。

優奈「よ」

怜音「おう」

怜音、優奈の連れの女性に一礼する。
優奈「新聞配達のもの——」

美穂「ああ、転校生の。いつも妹がお世話になつてます」

怜音「(もごもごと) こちらこそ」

教室の扉が開いて薫が出てくる。

薫に一礼して中へ入つて行く優奈と美穂。

薫も一礼を返す。

薫が廊下を進み、ついでに行く怜音。

怜音「高校、ほんとにいいの?」

薫「当たり前でしょ。高校くらい行かないと。」

ほんとに行かないつもりだったの?」

怜音「俺が働かないと、つて」

薫「ったく。(怜音を見て)状況は変わったの。」

あんたは誰かを養うんじゃない、養つて

もらう立場なの」

怜音「でも……」

薫「……甘えるって事を知らないんだねえ」

怜音「でも、進学はお金が掛かるし」

薫「面倒そうに）ああ、いいから。もうあ

んたは貧乏人の子じゃないの。普通の家の子なの。わかった？ 子どもがお金の心配するんじゃないよ」

○函館の空（朝）

○須藤家・LDK（朝）

朝食を食べ終えた怜音、台所で食器を洗おうとすると薫が

薫「いいって。置いといて。それよりこれ」

薫が包みから黒のダウンコートを取

り出して怜音に渡す。

薫「寒くなって来たから。着てみて。サイ

ズ違ったら交換して来るから」

コートに袖を通す怜音。

薫「うん。大丈夫ね」

薫、怜音の後ろに回って首元のタグを鉄で切り取る。

怜音「あつたかい……。薫さんありがとう」

薫「あんた、コート持っていないから。あんまりみっともない格好でうちを出入りさせても困るからね」

怜音「すぐくあつたかいよ」

薫「あと、軽いんだってね」

怜音「うん。凄く軽い。着てないみたい」

薫「それじゃ、ありがたみがないじゃないか」

怜音「ううん、ありがたいよ」

薫「(ぶっきらぼうに) 早く行きな」

○ファミレス・外

窓ガラス越し、テーブルを囲む薫と
杏子が見える。

○ファミレス・中

ソファ席に三人分のバッグやコート。
薫「ほんとに今迄どんな育ちをして来たんだろうと思つて。酷い母親だつたみたいでせう」

杏子「民生委員やつてると、色んな事情のある家庭を見て来てるけど、なかなか大変な環境で育つたみたいだねえ」

薫「やつぱりロクでもない女だつたんだよ、あの女」

杏子「担任の先生が、おばあさんに引き取られて良かったなんてねえ……。親を亡くして良かったなんて」

千絵が戻つて来る様子が見える。
薫「この話、千絵ちゃんには内緒ね」

千絵を見て、杏子、頷く。
ドリンクを手に千絵が来る。

千絵「お待たせ！ で！ どのなの薫ちゃん？ 孫！」
薫「どう……つて。まあなんとかかんとかやつてるわ」

千絵「子どもでもそうじゃない、小さい時から育ててるから情が湧くんで。そんな降つて湧いたのつてどうなの？」

杏子「(嗜める様に) 千絵ちゃん……」
薫「そうよねえ。降つて湧いて来たのよね、

孫が」

千絵「ごめんごめん。だって、中学生でしょ？

難しい年頃じゃない。急に一緒に暮らす

ってさあ。大変そうって思って」

薫「いきなりの親代わりだからね、大変よ。

こないだも学校の三者面談なんか呼ばれて」

杏子「あ、そっか。進学先考える時期だ」

薫「そうなのよ。今時の受験事情なんて全

然知らないし。ママ友っていうの？ そ

ういうのも居ないから、さつき刺繍教室

に来てる牧島さん、子どもが高校生って

いうから連絡先交換して貰ったの」

杏子「あの人とつてもいい人よ、色々教え

て貰うといいわ。上の子たち、年子で高

校生だから」

薫「なんだかほんとに面倒なんだけど。し

ようがないわよね」

杏子「張り合いが出ていいじゃない」

千絵「(少し面白くなさそうに) でもねー。

来る前に薫ちゃん言ってたじゃない？

ほんとに明生の子かしら？ って。DN

A鑑定どうだったの？」

薫の顔にほんの一瞬影がさす。

薫「明生がもう居ないんだもん、親子鑑定

出来ないわよ」

千絵「何言ってるのよ！ 薫ちゃんとすれ

ばいいのよ」

薫「……え？」

千絵「親子じゃなくなっちゃって血縁あるかどうかどう

かは、鑑定できるわよ」

薫「そうなの……？」

千絵「やったあ。してないの？　じゃあわかんないじゃない。赤の他人だったらどうすんのよ」

薫「……」

千絵「その子が須藤家の跡継ぎでしょ？

あの家も財産もその子に相続させる事になるんだから。こないだの保険金でひと財産入ってるんだし。調べとかないと」

薫「……」

千絵「しっかりしてよ！　郵便で出来るし、今はネットで何でも手続きできるんだから」

薫「……そうなの？　調べてみるね」

杏子、薫をちらと窺う。

千絵「私、おかわりして来る」

千絵、ドリンクバーへ。

杏子、薫の気を引く様に明るく

杏子「千絵ちゃん、必ず保険金の事言うわよね。幾ら入ったか気になってしょうがないのね」

薫「鑑定ねえ……」

杏子「知らなかった？」

薫「……」

杏子、注意深く薫の様子を見ている。

杏子「知ってた？　もうしたの？」

薫、黙って首を振る。

杏子「……あの子にとって今は天国なんじゃないのかな。これで違ったら……地獄じゃない？」

薫「地獄？　孫でもない、赤の他人、あの憎たらしい女の子もなら、知ったこつ

ちやないわ」

杏子「……随分と深い業だねえ……」

薫、自分でも発した言葉の語気の強さに驚いた様子。

○須藤家・外

薫、郵便受けに届いた大きな封筒を取り出している。

○同・LDK

封筒を前に考え込んでいる薫。

薫「よし」

封筒を開ける。

薫「一応、調べとかないとね」

薫が部屋を出て行った後も、口をぽっかり開けたままの怜音。

× × ×
フラッシュバック

薄いガラス障子の向こうで諍う人影。

女の声「あんたの子だってば！ だからあ

んたから怜の一字取って、怜音ってつ

けたんじゃない。何言ってるのよ」

男の声「そんなん分かったもんじゃねえだ

ろ。俺は知らねえつつってんだろ！」

女の声「待って」

男が女を振り払い、何かにぶつかっ

ているらしき音。

× × ×

口を開けたままの怜音。

○同・怜音の部屋

勉強机の椅子に座った怜音の口に、

薫が長い綿棒を入れて拭っている。

○同・玄関・前

自転車を停めた杏子、呼び鈴を押す。

今日はこの後があるから。これ、あちこち配んなきゃ」

○同・LDK

杏子、りんごの入った紙袋を薫に渡す。

杏子、座りながら窓辺の鉢植えを見て

杏子「はい。いつもの」

杏子「これ何？」

薫「(受け取って) いつもたくさんありがとうね」

薫「ミントだって」

杏子「だって？」

杏子「ね、久しぶりにあれ食べたいな。作ってよ」

薫「怜音が貰ってきたの、友だちからって」

薫「？ なに？」

杏子「良かったじゃない。友だち出来たんだ」

杏子「アップルパイ。昔作ってたじゃない。

薫「どうだかねえ」

よくお裾分けしてくれた」

薫、お茶を出しながら鉢を見て

薫「ああ。あれね。昔はしょっちゅう作ってたっけ」

薫「なんだかどんどん増えるのよ」

杏子「じゃあ、今度来た時にちょうだい。

杏子「ね、怜音君も喜ぶわよ」

育てやすいって聞いてて欲しかったの。

薫「……いいわよ。杏子さんの為に作るわよ」

杏子「ほんと？　ありがとう。楽しみにしてる。うちのも好きなんだ、あれ」

玄関ドアの開く音。

怜音の声「ただいまー」

杏子「おかえりー。早いよね」

薫「(杏子に) 期末試験中なのよ。(怜音に)

吉田のおばさんにご挨拶して」

薫は果物ナイフと皿を取って来て、

座ったままりんごを剥き始める。

怜音「(入って来て) こんにちは」

杏子「お邪魔してます。りんご持ってきたの。

食べて」

薫「手、洗ってきたな」

怜音、出て行く。

杏子「明生君の面影あるわよね」

薫「そう?」

杏子「なんか雰囲気っていうの？　全体が」

薫「私にはわかんないね」

怜音、戻って来て、促されて座る。

杏子「うちのおじさんの実家ね、青森なの。

毎年沢山送って来るのよ。美味しいから

食べて」

怜音「いただきます」

杏子、怜音を眺めて薫に

杏子「目元なんか明生君に似てるって」

杏子がりんごを手に怜音を眺めている。

怜音「……(居心地悪そう)」

薫「鼻と口は全然明生と違うわよ」

怜音、黙ったまま急いでりんごを食

べる。

怜音「(立ち上がって) ごちそうさま」

立ち上がった怜音に

杏子「そうだ、今度おばあちゃんがこのり
んごでアップルパイ作ってくれるって。

美味しいのよ」

怜音「薫さんが？」

杏子「(笑って)なあに？ 薫さんって呼ば
せてるの？」

薫「おばあちゃんじゃないもの」

怜音「……(一瞬固まる)」

杏子「(さらに笑って)アラカンなのに抵抗
するわねえ」

怜音「……じゃあ」

怜音、杏子にぎこちなく一礼して立
ち去る。

薫、立ち去った怜音の行方を見て

薫「あの子……、指の形は似てるんだよね」

杏子「え？」

○新聞配達所(朝)

朝刊を配り終えて戻って来た怜音、
曇った表情。

優奈がそばに来て

優奈「元気ないじゃん」

怜音「いつもと同じだよ」

優奈「確かに。元気いっぱいのところ見た事
ない」

怜音「うるさい」

優奈「ミント育ってる？」

怜音「ほんとにすごい勢いで増えている」

優奈「ね、何もしなくても育つでしょ？」

怜音「(少し笑って)うん。わさわさしてきた」

優奈「ロープウエイ乗った？」

怜音「まだ」

優奈「うっそ。何やってんの？ 早く函館

市民になんなよ」

怜音「乗らないとなれないの？」

優奈「決まってるでしょー。まったく」

怜音「(笑って) なんだよ、それ」

優奈「明日の日曜空いてる？」

怜音「え、あ」

優奈「バイト代出たし、明日、乗りに行こ

うよ。ロープウェイ」

怜音「え？」

優奈「(怜音を見て) 嫌なの？」

怜音、首を振る。

優奈「じゃ、決まり」

○ロープウェイ山麓駅

はしゃいだ様子の優奈。

怜音も楽し気。

× × ×

ゴンドラ・中

窓からの景色に歓声を上げている怜

音。

それを茶化す優奈。

× × ×

山頂展望台

望遠鏡を覗く二人。

× × ×

屋上展望台

風に煽られる二人。

○漁火公園

景色を見おろす二人。

怜音「漁火公園って、どんな意味？」

優奈「漁火って知らない？」

怜音、首を振る。

優奈「イカ釣り船が漁の時につける灯りを

漁火っていうの。イカ釣りの季節は夜に

それが見えるの」

優奈、指さして

優奈「あの辺に。キラキラして綺麗だよ」

怜音「知らなかった。イカって明るいのが

好きなんだ」

優奈「(笑って)違うよ。明るいのが嫌いなもの、

それで明るいのを避けて船の下に集まっ

て来るのを捕まえるんだって」

怜音「そうなんだ……。逃げるつもりが結

局捕まるんだ。逃げられないんだ……」

優奈「？ あんたもそうなの？」

怜音「え？ なんだよ、それ……」

優奈「なんかやたら感情こもって言うから。

何から逃げてんの？ 逃走中？」

怜音、一瞬思案顔を見せる。

怜音「今日は何からも逃げてない。すげー

楽しかった」

優奈「よかった。こっからの景色見たし、(怜

音の肩を叩いて)これであんたも今日か

ら函館人だ！」

怜音「(笑って)いてーよ」

優奈「三者面談来てたよね、おばあちゃん。

薰さんだっけ？ 仲良くやってるの？」

怜音の顔がまた曇る。

怜音「……どうかな。家族じゃないから。

俺ほんとに薫さんの孫かどうかかわかんないし」

優奈「(驚いて) 何言ってるの？」

怜音「ひく、よな」

優奈「家族は家族じゃん！一緒に住んでるんだから。私だってお姉の旦那は赤の他人だけど、一緒に住んでる家族だよ」

怜音「えっ？そこ？」

優奈「(きよとんとして) え？」

怜音「俺、薫さんと血が繋がってないかもしれないんだよ。薫さんの息子が父親ってなってるけど、母親なかなかクズだったから、それもわかんない」

優奈「そんなんさ、誰が誰の子かなんてわかんないもんでしょ？どっかの国なんて、調べたら三割は浮気相手の子だった

つて。でも知らなきゃそれで平和な家族

つしよ」

怜音「ん？」

優奈「ドンマイ！一緒に暮らしてたら、もう親子、家族でしょ」

怜音「え……？」

優奈「うちさ、両親居なくなつて、そりゃほんとにそれは悲しかったし嫌だよ。でも、お姉が結婚して子供が出来てって家族が増えて。家族って作れるんだな、って」

怜音「作れる？」

優奈「(頷いて) 生まれた家族がイマイチだったり終わっちゃったとしてもさ、やり直し？今度は自分で作ってけるから。うちみたいに」

怜音、優奈を眩し気に見ている。

近くを幼児を二人連れた家族連れが通る。

優奈、それを見ながら

優奈「いいよー、家族。私も大人になった

らまた増やすんだ」

怜音も家族連れに視線を向ける。

怜音「でも子どもは旦那の子じゃないかも

しれないんでしょう？」

優奈「(笑って) かもねー。でもそんなん気

にしない人選ぶから、大丈夫！」

怜音「(笑って) そんなん居るかよ」

優奈「あんただったら許せない？」

怜音「(考えて) 十五歳には想像つかない質

問です」

二人、笑い合う。

○同・LDK(夜)

パジャマ姿でワインを飲んでいる薫。

怜音がやって来て、テーブルの上に

封筒を置く。

薫「？」

怜音「バイト代、入ったから」

薫「いいって。自分で使いな。自転車とかさ、

欲しいもんあるだろ」

怜音「でも」

薫「いいんだって」

薫、乱暴に怜音に封筒を押しつける。

怜音「わかった。ありがとう」

怜音、立ち去ろうとして戻って来て、

躊躇いながら薫の後ろから声を掛け

る。

怜音「あの……もし、もしさ、こないだの

DNA鑑定の結果で、薫さんの孫じゃない

かったら——」

薫「……他人だよね」

薫、酔っている。

怜音「(薫の背中を見ている)……」

薫「あんたの父親が誰でも、あんたの母親

はあの女だろ？」

薫が振り向いて怜音を見る。

怜音、俯いて頷く。

薫「お父さんの話って聞いている？」

怜音、首を振る。

薫「なんにも？」

怜音、頷く。

薫、怜音に背を向ける。

薫「明生は十八で死んでんの。あんたの母親、

あの女と知り合って、高校中退して、あ

っ！という間に籍入れて」

薫、グラスのワインをあけて

薫「なのに女が出てって離婚して。絶望して、

やけになって酔った勢いで自殺したみた

いな死に方だった」

怜音「……」

薫「可哀想な人生だったよ。あの女に会わ

なきゃ、まだ生きてたさ。あの女に会わ

なきゃ明生は……」

薫の背中が微かに震え、ボトルに残

ったワインをグラスに注ぐ。

怜音「……」

薫「あんたの母親が明生と私の人生をすっ

かりダメにしたんだよ……」

怜音、黙って立ち去る。

薫「まあそんな話はいいさ。あんたには——」

薫、振り向くと怜音がいない。

○同・玄関（夜）

灯の消えた暗いままの玄関。

閉まっていく玄関扉。

○大通り（夜）

市電が走る通りを連れ立って歩く薫

と杏子。早足。

薫、ズボンにコートの姿だが、襟元

からパジャマの襟が覗いている。

杏子「出てったのは何時くらいなの？」

薫「わかんない。気づいたら居なかった」

杏子「そんな遠くには行ってないでしょ。

うちの少年課の見回りには知らせてる

から」

薫「ご主人、非番だったのにごめんね」

杏子「謝らなくていいって。知り合いに

警官居るんだから、こういう時に使わな

いと。どうせ先輩風吹かせてるだけなん

だから」

薫「ほんとにごめんなさい」

杏子「謝るならあの子に謝らないと。全く

何やってんの。子どもに罪はないだろに」

薫「飲んでたから」

杏子「悪い酒だねえ」

薫「今日、明生の命日で……」

杏子、ハツとする。

杏子「そうか、そうだったね……」

薫「怜音見てると思いだすんだよね。明生を。

でもあの子は明生をあんなにした女の子

どもだろ？ それだってわかんないんだ」

薫「……」

杏子「他人だったら、縁もゆかりも無い子どもと暮らす理由なんて無いし——」

薫「あの子だって、血が繋がってなきや、出てきたいかもしれない……」

杏子「薫ちゃん」

薫「あの子だって、血が繋がってなきや、出てきたいかもしれない……」

杏子「薫ちゃん！ あの子には他に行く場所がないよ。まだ子どもなんだよ」

薫「……」

杏子「(薫を見つめて) 怖いならDNA鑑定受けなくていいんじゃない？」

薫「怖くなんか——」

杏子「千絵ちゃんに言われなくなっただって知ってたでしょ？ ほんとは知ってたでしょ？ DNA鑑定出来るって。なのに薫ちゃんは受けなかった」

薫「知らなかったよ、ほんとに。親子鑑定
つていうから」

杏子、薫の腕を掴んで、薫を見て

杏子「ウソ、ウソ、大ウソ！ 監察医とか医療刑事もの大好きじゃない？ 知らないわけないでしょ。今年のお正月スペシャルでもやってたし」

薫「……そうだっけ？」

杏子「それに、あれ、いつだったか貸してくれたベストセラー。あれにもあったわよ、DNA鑑定の話」

薫「……もう鑑定に出しちゃったの」

杏子「……もう鑑定に出しちゃったの」

薫「……もう鑑定に出しちゃったの」

杏子「あれ、あれ、あれ、あれにもあったわよ、DNA鑑定の話」

薫「……もう鑑定に出しちゃったの」

杏子「あれ、あれ、あれ、あれにもあったわよ、DNA鑑定の話」

薫「……もう鑑定に出しちゃったの」

杏子「あれ、あれ、あれ、あれにもあったわよ、DNA鑑定の話」

薫「……もう鑑定に出しちゃったの」

杏子「あれ、あれ、あれ、あれにもあったわよ、DNA鑑定の話」

薫「……もう鑑定に出しちゃったの」

杏子「え？」

薫「うん……」

○函館の夜景

○函館駅・バスターミナル（夜）

ベンチを窺いながら進む薫と杏子。

薫「（ハツとして）明生の事もこうやって探した……あの頃もよく手伝って貰ったよね」

杏子「そうだったね」

薫「何度も何度も……。でもその内諦めたんだった……。諦めて、明生はどうとう帰ってこなくなつて……」

杏子「……」

杏子のスマホに着信音。

○警察署・前（夜）

駆け足でやって来る薫と杏子。

建物を目にして、薫の足がピタリと止まる。

杏子「（振り向いて）薫ちゃん」

薫「（呆然としている）……」

杏子「薫ちゃん！ どうしたの？」

薫「（建物を見ながら）前に来た時、前に来たのは、死んだ明生を迎えに来た時で……」

× × ×

フラッシュ

警察署の霊安室（前出では明らかでなかった場所が明らかに）

布の掛けられた遺体の手。

その指をなぞる薫の手。

× × ×

○同・応接室（夜）

薫、取り乱して涙を浮かべている。

気丈な表情の薫が入って来る。

薫「ね！ 怜音は？ あの子は生きてるよ

薫の買ったダウンコートにくるまり、

ね？ 明生と違うよね？ 大丈夫だよ

ちんまりと座っている怜音。

ね？」

その姿に、わずかに涙が滲む薫、怜

杏子「（薫の肩に手を回して）大丈夫、大丈夫。

音の前に立って。

ちゃんと少年課に補導されて、中で待つ

薫「バカだねえ、心配させないの。子ども

てるから」

が行くところなんて無いだろ。うちがあん

薫「待つてる？ 私を？」

たの家なんだから」

杏子「そう。いるから。大丈夫」

怜音「ごめんなさい」

建物の中へ入っていく薫と杏子。

薫「吉田のおじさんとおばさんにもすつご

○同・廊下（夜）

掛ける事しちゃダメだよ。わかった？」

署員に誘導されて歩く薫。

怜音「でも……」

動揺は収まっている。

薫「でも、じゃないの。ほら、自分ちに帰るよ」

怜音立ち上がる。

署員に頭を下げて部屋を出る薫と怜

音。

○同・受付前廊下（夜）

薫と並んで歩く怜音。

薫「公園で何してたの？」

怜音「海見ってた。漁火、見ってた」

薫「漁火？」

怜音「うん」

薫「漁火、見た事無かった？」

怜音「うん、初めて見た。キラキラしてき

れいだった」

薫「……」

○同・玄関・外（夜）

玄関から出てくる薫と怜音。

薫「ごめんね」

怜音「え？」

薫「悪いお酒だったよね。あんたは何も悪

くないのに。ごめんね。絡み酒だ、よく

ないね」

怜音、首を振る。

薫「大人つてやだね、酔っぱらったりしてさ。

悪かったよ」

怜音「酔っ払いには慣れてるから……」

薫、怜音の言葉にやり切れない表情

になる。

薫「今日ね、明生の、あんたの父さんの命

日だったんだ、もう昨日だね」

怜音「そう」

薫「言い訳だね。でも、やり切れなくなっ

てね。八つ当たりしちまった……。もう

しないよ」

怜音「いいよ、大丈夫……。あの、鑑定の

結果——」

怜音言いかけて止まる。

薫は気付くが聞こえないフリ。

薫「あ、車来たよ」

杏子の運転する車が二人の前に停まる。

○須藤家・LDK（夜）

背を丸めて食卓に着く怜音。

薫の声「（台所から）うろうろしてて冷えたろ」

怜音「大丈夫。コートあったから」

薫が味噌おじやを持って来て怜音の前に置く。

薫「ほら、あったまるから」

怜音「あ、味噌おじやだ」

薫「ん？」

怜音「小さい時、母さんが作ってくれたんだ、これ。たまに贅沢して卵が入ってて……。

これ入ってるね」

薫「……そう。これ、明生が好きだったから」

怜音、美味しそうにおじやを頬張る。

薫「そう……あんたの母さんも作ったんだ

……。あの子が教えたんだね」

薫、怜音を見ている。

怜音「おんなじ味だ」

薫「……（怜音の指を見つめる）」

薫、立ち上がり、学校のパンフレットを持って来て、怜音の前に差し出す。

薫「そうそう。まあまあ優秀だって先生も

言つてたし、どうせならさ、大学も行くような高校に入つてよ」

怜音「え？ 大学？」

薫「ああ」

怜音「大学つて、お金掛かるし……」

薫「明生には大学へ行つてほしかったけど、

あの子は高校も途中で辞めちゃったから。

あんたが良ければ、だけど」

怜音「函館から出る事になつてもいいの？」

怜音の顔を見ている薫。

薫「もちろん。また戻つて来てもいいし、

戻つて来なくてもいいし。兎に角大学は

行くつもりで」

怜音「いいの？」

薫「うちの人は大学行きたくても行けなかつたからね、息子は大学に行かせたがっ

てたんだよ。夢だったからさ。お金の心配なんかしないで、勉強頑張つとくれ」

怜音、大きく頷く。

薫「あんたのおじいちゃん事故の保険金があるから、実はちよつとした小金持ちなんだよ、うちは。だからなんも心配しなくていいから」

怜音、微笑んで頷く。

が、その後すぐに表情が曇る。

薫は気付くが気づかないふり。

○同・怜音の部屋（夜）

スマホで検索している怜音。

『DNA鑑定』関連のサイトを見ている。

怜音、暗い表情。

○杏子の家・LDK

テーブルに薫と杏子。

薫「杏子さん、どうしよう……」

杏子「？」

薫、鑑定書在中と朱書きのある書留
を取り出す。

杏子「これって……」

薫、頷く。

杏子「まだ開けてないの？」

薫「……怖くなっちゃって」

杏子「気持ちは分かるけど」

薫「もう一人つきりだって思ってたのに、
あの子が来て……。明生が戻って来た様
な錯覚をする事があるの」

杏子「……似てるからね」

薫「育て直し、やり直せるような気がして」

杏子「薫ちゃんの言ってる事はわかるよ。

明生君に出来なかつた事が出来るかも、
って。でもねえ、あの子は明生君じゃな
いから、そこは気を付けて」

薫「そうなの、わかっている。(言い聞かせる
様に) わかっている」

杏子「封筒、開けられないの？」

薫「夢が覚める気がしてね」

杏子「夢か……。最初あんなに迷惑がって
たのに」

薫「勝手よね」

杏子と薫、笑い合う。
杏子「臆病なんだから」

杏子、立ち上がって錠を取り、薫の
前に置く。

薫、杏子を見つめて

薫「決めた。杏子さん、私、臆病じゃない」

杏子、頷く。

薫、凜とした表情。

考え込む怜音の顔。

× × ×

フラッシュバック

警察署の応接室

迎えに来た薫の僅かに涙の滲んだ顔。

× × ×

怜音の部屋

立ち上がる怜音。

○須藤家・怜音の部屋

怜音、机の上の学校パンフレットを

めくる。

大学キャンパスの写真を眩し気に眺

める怜音。

× × ×

フラッシュバック

冒頭の病室シーン

女の声「取り入って上手くやんな。あんた

なら出来るって」

× × ×

怜音の部屋

○同・LDK

台所で立ち働く薫。

怜音がやって来て、離れて、テーブル

ルの脇に立つ。立ったまま。

怜音「……」

薫「(怜音の気配を察知して立ち働きながら)

なに? どしたの」

怜音、薫の背中を真つ直ぐ見つめて

怜音「薫さん、ごめんなさい。俺……、母

さんに上手く取り入れって言われてた。

薫さん、ごめんなさい」

頭を下げて、俯いたままの怜音。

薫は平然として、コーヒーメーカー

をセツトしている。

怜音、涙を滲ませ、でも顔を上げて

怜音「俺……孫じゃないんだ、俺は薫さん

の孫じゃない……。知ってたのに、嘘つ

いて誤魔化そうって」

オーブンのチンという音。

薫「(怜音を気にせず、独り言) うまく焼け

たかね」

怜音「俺……」

薫「何ぼそぼそ言ってるの。最近耳も遠く

なっちゃってね、聞こえやしない。もう

補聴器必要なのかしらね」

薫、オーブングローブを嵌める。

怜音「(声を張り上げ) DNA鑑定の結果が

——」

薫「ああ、あれ、間違いなく孫だったよ」

怜音「えっ……」

薫「百パーセント私の孫」

薫、オーブンから焼き上がったアツ

プルパイを取り出す。

薫「(見て、満足げに) よし」

怜音、へなへなと傍らの椅子に座り

込む。

薫「(怜音に) ん? なに?」

怜音「(薫を見上げて) おばあちゃん!」

薫「だから、薫さん! だってば!」

怜音「(嬉しそうに)でも、俺のおばあちゃん

る。

んなんでしょ? ほんとおばあちゃん
だったんでしょ?」

薫「あ、ちょっと待って」

薫、窓辺のミントの鉢のそばへ。

薫、アップルパイを切り分けながら

ミントが茂り、鉢の数が増えている。

薫「あーもうやだねー。ばあちゃんばあ
ちゃん煩いよ。他所で、うちの祖母っ
うのはいいけど、面と向かって呼ぶとき
は薫さん、わかった?」

薫、ミントの葉を摘むと、流しで洗い、
水切りにミントを振りながら戻って
来る。

怜音「うん!」

薫「(アイスにミントを千切って載せて)ほ
ら! この方がおしゃれだ」

薫、アップルパイを皿に乗せ、隣に

怜音「(笑って)おしゃれだ」

アイスクリームを盛る。

怜音、スマホで撮影してから

薫「こうやって食べると美味しいんだ」

怜音「いただきます」

薫、怜音の前に皿を置く。

薫も自分の分の皿をテーブルに置く。

薫「ほら」

薫「私はコーヒー飲むけど、あんた紅茶か
い?」

怜音「いただきます、つとその前に」

い?」

怜音、スマホを取りだして写真を撮

怜音「あ、コーヒーでいい」

薫、自分のマグカップにコーヒーメ

ーカーからコーヒーを注ぐ。

棚から、冒頭シーンで仕舞っていた

マグカップを取りだして、それにも

注ぐ。

怜音「これ、こないだ吉田のおばさんが言

ってたやつ？」

薫、二つのマグカップを置いて座り

ながら

薫「そうそう。後で杏子さんのところにお遣

い行ってくれる？ 焼き立てあげたいん

だ」

怜音「うん」

薫「久しぶりに焼いたからね、自信無いけど」

怜音「うつま！ あ。すぐくうまい、美味

しい、です」

薫、目を細めて

薫「これも……こうやってアイスと食べる

の、明生が、あんたの父親が好きでね」

怜音、美味しそうに食べている。

薫「あん時、ミントは無かったけどね」

怜音「じゃあ、俺バージョンはアイス＋ミ

ントで」

薫も食べながら

薫「あ、アップルパイと一緒にミントの鉢

も一つ、杏子さんとこ持ってって」

怜音「うん。あげるの？」

薫「そう、欲しがってたからね」

怜音「ふーん。なんか俺役に立ったみたい

で嬉しいな」

薫「？」

怜音「俺の育てたのを欲しいって言ってく

れる、って、なんか嬉しい」

薫「そう？ 貰って貰って嬉しいなら、今

度刺繍教室の時、持ってて配って来るよ」

怜音「それは違うっしょ。望まれてから渡

さないと」

薫「なーに言ってるんだか」

アップルパイを食べる食卓の二人、

楽し気な祖母と孫。

○同・庭（夜）

月に照らされる庭の木。

○怜音の部屋（夜）

ベッドに怜音。

スマホに通知音がして覗き込む。

画面にはラインのやり取り。

怜音の送ったアップルパイの画像に

優奈から返信が来ている。

優奈『何これおしやれ！ 美味しそう』

怜音『薫さんの手作り』

優奈『えっ？ すっごー！ 薫さんやるね！

これ、あのミント？』

怜音『気づいた？ そう』

優奈『うわー ミントも本望だ』

怜音『薫さんの友だちにも分けたんだよ』

怜音、微笑みながらスマホを操作し

ている。

○同・薫の寝室（夜）

スタンドの灯りだけ。

薫、小引き出しから、鑑定結果の書

留を出す。

裏返すと、封印されたまま、未開封。
薫、封筒ごと破り捨てて、ゴミ箱へ。

○海
(夜)

函館の夜景の向こうで、きらめく漁
火。
漁火が消える。

〈了〉

本電子書籍は、2021年12月3日発行の『第27回函館港イルミネーション映画祭2021 第25回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリの作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第27回函館港イルミネーション映画祭2021
第25回シナリオ大賞 準グランプリ

指の形

作：本田 周

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2022年2月24日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
